

田舎暮らしと空き家問題

牧野 仁（建設部門）

いわてを見る

コロナウイルスの影響で、なかなかすっきりした春を感じられないこの頃、皆様は何で春を感じますか。雪解け、暖かさ、桜や梅などの花類、人それぞれ春の感じ方は色々あると思います。私の春はあまり歓迎できない匂いで始まります。隣の水田に撒かれる牛の糞、いわゆる「田舎の香水」により、今年も春が来たなと感じられるのです。

私の住処は周りを水田や山に囲まれた「田舎」であり、近くには杉林に紫陽花を植えた「みちのくあじさい園」なるものがあります。ご多分に漏れず私の田舎においても、少子高齢化と人口減少が進行しており、一番の悩みとなっているのが空き家の問題です。我が家の周り半径300m以内には家が8軒ありますが、そのうちの3軒は空き家となっています。空き家となって10年以上が経過し、元の所有者は亡くなり、相続人も住むつもりはないようです。建物も朽ち果て、いつ崩壊してもおかしくない状況で、建物の周辺は雑草や竹が伸び放題の、さながら「お化け屋敷」と化しているのです。

この空き家、景観だけの問題にとどまりません。一番の問題は、野生動物がこの空き家に住み着いて、寝座としていることです。きつね、たぬき、イタチ等は当たり前で、ある日の朝は我が家の庭をカモシカが横切っていました。農作物にも被害を及ぼすこれらの動物は、駆除しようにも人慣れしてなかなか捕まりません。

この空き家問題、全国的にも増加傾向となっており、総務省統計局の資料によると2018年における全国の空き家軒数は848万9000戸で、空き家率は13.6%となっています。空き家を減らす取り組みとして、「空き家バンク」なる取り組みが進められていますが、活用された話はなかなか聞こえてきません。も

っとも、空き家となる原因が人口減少と都市部への人口集中であることから、その原因に対する対策が進まない限り、空き家が減少することは無いと思われます。特に田舎における空き家は、高齢により車の運転がままならなくなり、やむを得ず田舎を離れるケースが多いように思います。地方の公共交通が赤字を理由に減少している現代においては、マイカーは田舎暮らしの必需品となっており、今後老化により免許返納となった日には、この生活が続けられるだろうかと不安になります。

そこで期待するのが、技術の進歩による自動運転レベルの向上です。最近の自動車においては、追従走行のクルーズコントロールや車線維持走行、自動ブレーキ、急発進防止装置など運転支援機能を搭載した車両の進歩は目覚ましいものがあります。更にITを駆使し、「ダイナミックマップ」と呼ばれる高精度3次元地図情報と連携した自動運転車の開発が進められているとのことで、老化が進む年代にとっては希望の光です。また、車両だけではなく自動運転サービス導入による移手段の確保を目的とした社会実験も進められています。このような技術の進歩とサービス導入により、中山間地域の定住意識を向上させることは、日本の食料自給率を担っている農業の維持だけでは、減災の意味からも重要なことと考えられます。間伐材の放置など森林の手入れが疎かになれば、流木による河川被害や土石流の発生など大災害の増加につながっていきます。減災の役割を果たす里地里山、その場所への定住意識向上のためには、「将来の安心」が必要です。

岩手においても、中山間地域における「生活空間」を守り続けるための自動運転サービスが整うことを期待して、田舎暮らしを続けることとします。